第三百二十五話　心までをも抹殺するのか！

民主主義と自由を標榜する国家が、敵国に対して斯くまで残酷且つ傲慢になれるのだろうか？自己否定にも匹敵する所業だ。文化や歴史の抹殺は、アイデンティティの喪失、民族抹殺である。肉体的な虐殺以上に深刻・永続的な影響を及ぼす。始皇帝の焚書坑儒にも匹敵する歴史的大罪だ。未だにその呪縛から解き放たれていない日本が悲しい。検閲も当然ながら行ったのである。、WGIP については本メモランダム１５話を参照して欲しい。

１　戦前・戦中間の図書類の没収政策の概要（参考　西尾幹二著「GHQ 焚書図書開封」）

ＧＨＱは、大東亜戦争前から戦中に刊行された出版物を「宣伝用刊行物」として没収した。その概要は以下の通りである。

（１）ＧＨＱの日本政府に対する「宣伝用刊行物の没収」指示（Ｓ２０年３月１７日）　事後４８回にわたり没収指定リストを通知

著名な日本の大学や学者等が協力

文部次官通達を発出し、知事を没収責任者とした。

（２）ＧＨＱの担当部署

Ｇ－２内民間諜報局（CIS）に属する民間検閲局（ＣＣＤ）の下部組織ＰＰＢ部門に調査課（ＲＳ）を設けて選別を行った。米軍属６名、９～２５人程度の日本人

（３）没収本の対象期間　　昭和３年から昭和２０年９月２日まで

（４）没収の対象　個人所蔵及び図書館所蔵の出版物は除く。

（５）没収担任：各都道府県知事が警察と協力して実施、市町村の有識者を没収官に指定

（６）没収された出版物の行方

・米国に移送され、メリーランド大学のブランゲ文庫となっている。

（図書、パンフレット：71,000 タイトル、雑誌：14,000 タイトル

新聞：18,000 タイトル、その他地図、ポスター、写真類）

・ワシントン文書センターに収集されたのち米国議会図書館及び国立公文書記録管理局　　２７万点

・日本でパルプ化（日本の学童用の教科書に再生）

（７）没収総数　日本政府没収冊数は約２００万冊である。

２　教科書塗り潰し政策の概要

S20 年４月頃から米国務省が検討していた「降伏後における米国の初期対日方針」は９月２２日に発出された。対日方針は、日本が再び米国および世界の脅威にならないように、日本の非軍事化・民主化を目的とし、その一環として「軍国主義教育の廃止」を謳っていた。

（１）文部省「新日本建設のための教育方針」発出（1945/9/20）

紙不足もあり、新教科書を準備できないため、従来教科書の軍国主義的個所の削除（応急処置）　Ｓ２０後期用教科書から「忠君愛国」「戦意高揚」等を児童たちが黒塗りして使用、占領政策の先取り的暫定措置

（２）ＧＨＱ「終戦に伴う教科書取り扱いに関する件」発出

文部省の方針だけでは不十分であるとして、教育に関する指令を矢継ぎ早に発出した。所謂「四大改革指令」である。〇不適格教育者の追放（４５万人中１２万人が辞職・追放）（第二）〇修身・地理・歴史教育の禁止と回収（第四）　〇体育：なぎなた、柔道、剣道等禁止、軍隊式行進禁止

（３）「海ゆかば」「愛国の花」、当時の日本人口・面積、大東亜共栄圏等の語彙削除

＊　悲しいが、彼等の日本再生計画は成功した。喪ったものが余りに多く、回復は至難だ。それにしても、易々諾々と順応させられたものだ。これが日本人か？

（了）